別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年5月1日

氏名　南雲史代　印

研究分野	研究内容のキーワード
生涯発達看護学、小児看護に関する実践分野	小児看護学、小児急性期看護、NICU看護、子育て支援、母子相互コミュニケーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）大学院での教育 （1）修士課程「助産診断論」でNICU・GCUの看護研究を題材とし演習型授業の実施	平成28年7月	筑波大学大学院 人間総合科学研究科看護科学専攻博士前期1年次講義科目「助産診断論」（90分・2コマ担当）では、誕生後に、集中治療を必要とする子どもへの看護の実際、母親の心理と育児、産科との連携に触れながら、Family Centerd Care、母子相互作用について、概念および最新の研究結果を中心に講義を行った。早期産・低出生体重児の相互コミュニケーション能力に関連する研究を紹介しクリティークをした。さらに「助産師としてできるNICUに入院する子どもを持つ母親への関わり」についてディスカッションし、母子相互作用における周産期における看護課題を抽出することができた。
（2）高度実践看護を支える理論・モデルの理解にむけけた英文教科書の活用	令和5年4月～現在に至る	常磐大学大学院看護学研究科「小児専門看護学特論Ⅰ」（専門科目、1年次配当、選択2単位）では、看護の立場から、小児期にある人とその人を取り巻く家族を看護の対象として理解するために、必要な子どもの成長・発達の原則と諸理論（愛着理論、認知発達理論、道徳性などの社会性の発達、など）を英文教科書や論文を用いての講義を行った。講義後、各理論の観点から事例を分析し、実践にどのように応用できるかについてプレゼンすることを通し、複雑でたような状況を包括的に捉える方法を学修する。
2）大学での教育 （1）早期体験実習での臨地実習指導	平成30年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「基礎看護実習Ⅰ」（専門科目、1年次配当、必修1単位）では、5日間の実習に付き添った。看護実践の場や看護活動、看護職が協働する医療チームについて理解し、看護への思いや行動をに体験できるように、臨地実習指導者および病棟師長と適宜協議しながら支援を行った。学生の体験が看護学を学ぶ動機付け、また自己の課題が明確化することができたと考える。
（2）フィジカル・アセスメント技術習得のためのシミュレーションモデルの活用	令和元年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「ヘルスアセスメントⅠ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。肺・胸郭系における系統的フィジカルアセスメントでは、シュミレーション機材を摂り入れ、肺・胸郭系のフィジカルイグザミネーションの方法、およびフィジカルアセスメントの原則が理解できるように授業計画を立案し、講義・演習を進めた。

(3) E-learningを活用した授業外学習促進の試み	令和元年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「ヘルスアセスメントⅠ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。 肺・胸郭系における系統的フィジカルアセスメントでは、事前学修が効果的に行なえるようにE-learningを活用し、授業外における学習を促進する取り組みを行った。授業では、事前課題の実施状況を確認するとともに、その内容について解説を行った。状業後は課題を回収し、評価後、各学生へ返却した。
(4) 演習における振り返りシートの活用	令和元年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「ヘルスアセスメントⅠ」（専門科目、2年次配当、必修1単位）で実施した。 肺・胸郭系における系統的フィジカルアセスメントでは、演習での学びを言語化し、今後の学修へつなげていけるように、振り返りシートを作成し配付した。演習後、各自で看護師役と患者役、それぞれを実施して気付いた点や改善を要する点などをシートに記入させ、期日までの提出とした。実際に体験して気付いた点、さらにそこからどのような配慮や援助が必要と考えたのかが、具体的に記述されていた。評価後、各学生へ返却した。
(5) PBL（Problem-based Learning）教育の実施	令和元年9月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「情報と看護展開Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）で実施した。PBLに基づき、対象の場面から情報を捉え・収集し・判断できるように、小児領域のシナリオ（発熱した子どもの看護）を領域内で検討・作成した。演習においては、学生の自発性・関心・能動性を引き出せるように、かつグループ・ダイナミックスにより、学びが深まるように支援を行った。考える力を養う教育の評価を目的とし、セメスター終了後、学生に対しアンケート調査・面接調査を行った。
(6) アクティブラーニングによる主体的・対話的な学びの実践	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「情報と看護展開Ⅲ」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。コロナ渦の遠隔授業においても、学生の自発性・関心・能動性を引き出せるように、チューターとして、各グループ学生から提出された学びに対し、コメントを返しながら支援を行った。学生が地域・国際看護の場面において、視野を拡げ、根拠に基づき考え学ぶことができるように導いた。
(7) 援助場面に合わせた視覚教材の活用	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「生涯発達における援助技術」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。小児看護領域における輸液の管理に関する援助技術では、援助技術がより明確に理解できるように、点滴管理の援助場面のビデオ（映像）を作成し、Google classroom内にupした。学生は演習中の手技の確認として、また授業外での学修として映像を活用した。

(8) インストラクショナルデザインによる効果的な学びの実践	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「生涯発達における援助技術」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。小児看護領域におけるバイタルサイン測定、輸液の管理に関する援助技術を担当した。観察・測定の目的・根拠を自らが考え学ぶことができるように授業計画を立案した。バイタルサインの測定では、新生児期から学童期のフィジカルアセスメント特徴と注意点を理解できるように、講義中、動画や画像を用いて視覚的に示しながら説明を行った。演習においては、実演によるデモンストレーションとともに、輸液の管理の演習では、作成した援助場面の映像を加え、視覚的に示すことで分かりやすく説明を行った。演習中は、ラウンドにより学生の進捗状況を確認・把握しながら支援を行った。学生からは、授業外でも映像を視聴できたことで、自己学修を促進することができ、学びを深めることができたとの意見が寄せられた。
(9) 演習におけるディスカッションの導入と振り返りシートの活用	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「生涯発達における援助技術」（専門科目、3年次配当、必修1単位）で実施した。小児領域におけるバイタルサイン測定、輸液の管理の演習では、演習での学びを言語化し、今後の学修へつなげていけるように、チェックリスト兼振り返りシートを作成し配付した。演習中、他者が、チェックリストに沿って援助技術の評価を行った。演習後、チェックリストを基に、各自で看護師役と母親役、それぞれを実施して気付いた点や改善を要する点などをディスカッションを行い、各自でシートに記入し、期日までの提出とした。振り返り実際に体験して気付いた点、さらにそこからどのような配慮や援助が必要と考えたのかが、具体的に記述されていた。評価後、各学生へ返却した。
(10) シミュレーション制作の工夫	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「小児看護援助」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実施した。小児看護における慢性期の看護を担当し、白血病の子どもの看護の事例を作成した。学生が対象の子どもだけでなく、家族、きょうだいに視点を拡げ、根拠をもって看護問題・計画を立案できるように支援した。演習においては、学生が立案した援助計画のロールプレイを通し、学生の自発性・関心・能動性を引き出せるように、支援した。ロールプレイにおいては、ロールプレイ概要用紙を配布し、子ども役、看護師役、母親役、また発表を聞く側として気付いた点、さらにそこからどのような配慮や援助が必要と考えたのかを記述した。
(11) ICT教育の活用		
(a) 演習におけるICT教育の活用	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「小児看護援助」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実施した。小児看護における慢性期（白血病の子ども）の看護の講義は、コロナ渦におけるオンライン授業であったため、学生が対象の子ども、家族やきょうだいをより身近に捉え、イメージをすることができるように写真や画像を多く取り入れ、視覚的に示すことでわかりやすく説明を行った。学生は、moodleにupしたパワーポイント資料をダウンロードし、資料を手元に置きながら視聴した。パワーポイント資料は、各スライドの重要箇所（１～２箇所）を穴抜きとし、授業へ集中できるように、また重要ポイントを理解しやすいように支援した。

(b) 臨地実習におけるICT教育の活用	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実施した。緊急事態宣言発令中（コロナ渦）の小児看護学実習では、一部が学内実習となった。当該施設での実習を想定した事例（固形腫瘍の幼児、ネフローゼ症候群の乳児、先天性心疾患の新生児）を作成した。子どもと家族のニーズ、健康問題を特定し、それらの改善のためのケア計画を立案・実践し、評価できるように、双方型オンラインシステムと学内登校を交互に取り入れ、対話型の支援を継続した。援助の実施においては、立案した計画を場面ごとに子どものベッドサイドなどを設定し、ロールプレイを通し体験した。学内実習では、実際に病気をもつ子どもと、その家族に会うことはできなかったが、学生から「子どもと家族が目の前にいるように感じた」「援助計画立案時、子どもと家族が少しでも良くなるようにと考えた」などの意見が寄せられ、学内実習に真摯に取り組むことができていた。
(12) 小児看護学の臨地実習指導	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実施した。健康問題を持つ子どもと家族に対し、子どもと家族のニーズ、健康問題を特定し、それらの改善のためのケア計画を立案・実践し、評価できるように支援した。また医療型障害児入所施設での実習においては、子どもの人権尊重・教育、および成長発達の関わりへの視点を中心に学びを深めることができるように支援し、学生の自発性・関心・能動性を引き出した。
(13) ルーブリック評価表を用いた自己評価と教員評価	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実施した。小児看護学実習評価用ルーブリック、および小児看護実習評価表を作成し、実習の振り返りとして自己評価をする際に、ルーブリックで望ましい学修修熟度を具体的に示した。学生と具体的な評価の共通理解を図るとともに、教員間での公平な評価が可能となり、指導のポイントを明確化することができた。
(14) 臨地実習におけるディスカッションの導入	令和2年4月～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において、小児看護の分野における専門性について学ぶ目的で、日々テーマを決め学生同士でディスカッションする時間を設定した。学んだことをディスカッションすることで体験の意味づけにとどまらず、学生同士で学びを共有することができ、臨床現場をみる視野が広がった。中間、最終ディスカッション（カンファレンス）では、臨地実習指導者・病棟師長も参加することで、学生の自己の課題をさらに明確化することができた。
(15)研究課題探索力・報告書作成力促進への工夫	令和3年度～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「統合実習」（専門科目、4年次配当、必修2単位）、「看護課題の探究」（専門科目、4年次配当、必修1単位）において、自発的・能動的に研究課題および統合実習計画書を導きだせるように関連資料やWordを提示しながら支援を行った。また報告書の作成においては、自らの目的を適宜振り返ることを声かけ、重要な情報（目的に沿った）を中心に報告書をまとめあげられるよう、支援をした。

(16)看護の質評価を考えるシナリオおよび視覚教材の工夫	令和3年度～現在に至る	常磐大学看護学部看護学科「看護の質改善」（専門科目、4年次配当、必修1単位）において、直接ケアに関わる「医療安全」の問題について、直接ケアに関わるシナリオおよびせん妄患者への援助場面のビデオ（映像）を作成し提示することで、学生自らが課題をみつけ看護の質改善について学修できるように支援した。
(17) 医療器材を導入した救急法の体験学習	令和4年度	常磐大学総合政策学部「救急法の理論と実際」（選択1単位）において、医学の基礎知識がない学生が、救急法に関する基礎的知識、救急法に関する身体の仕組みを習得できるように資料を作成した。心配停止の場面を想定し、AED装置およびモデル人形を用いて、心配蘇生の実際を体験し、基本的手技の習得を支援した。
(18) 臨床パンフレットの活用		
(a) 生体肝移植（レシピエント・ドナー）	平成14年11月 平成15年11月	筑波大学医療技術短期大学部　「小児看護学」において「小児生体肝移植」（2年次、80名対象、90分1コマ）を担当した。信州大学付属病院で経験し学んだ、当時最前線の生体肝移植について、また筑波大学附属病院で関わっていた親子間の生体肝移植の事例を通しながら、移植医療を取り巻く課題、看護に求められる支援について、講義を行った。小児生体肝移植の看護では、援助の実際を理解しやすいように、レシピエント、ドナー双方のパンフレットを用いて、内容を説明しながら講義を行った。
(b) プレパレ―ションの実際	平成27年4月	茨城キリスト教大学看護学部　小児看護学Ⅱにおいて「周手術期にある子どもと家族の看護」「急性期疾患の子どもと家族の看護」（3年次、80名対象、90分3コマ）を担当した。「周手術期にある子どもと家族の看護」ではプレパレーションのおもちゃや、プレパレーション時の写真をまじえながら、実際の援助場面を視覚的に示し分かりやすく説明を行った。「急性期疾患の子どもと家族の看護」では、子どもの体験する環境として急性期病棟の写真、家族の手記などをまじえながら、子どもと家族の看護上の課題と看護の実際をイメージし、理解できるように講義を行った。
(19) 臨床研究の活用	平成23年11月 平成24年2月 平成25年2月	筑波大学医学群看護学類　「助産診断論」において「NICUにおける看護」（4年次・10名対象、90分1コマ）を担当した。誕生後、集中治療を必要とする子どもの看護の実際、母親の心理と育児、産科との連携について講義を行った。また修士で行った研究の結果（低出生体重児を持つ母親の育児自信とレジリエンス）を踏まえ、助産師として、NICUに入院した子どもを持つ母親に関わる上での課題を自発的・能動的に引き出せるように講義を行った。
(20) 臨床と学業（研究）の経験の提示	平成25年11月 平成26年12月	筑波大学医学群看護学類　「看護科学と社会」において「研究と融合」（4年次、80名対象、90分1コマ）を担当した。臨床と学業（研究）を両立することとなった自分自身の経験、および修士で行った研究の結果、また博士で行っている研究を紹介しながら、臨床と研究のつながりについて、身近な視点より捉えられるように講義を行った。

(21) 医療器材体験学習の導入	平成26年7月 平成27年7月 平成28年7月	筑波大学医学群看護学類　小児看護演習において「NICUに入院する子どもと家族の看護」（3年次、80名対象、90分1コマ）を担当した。誕生後、NICUにおいて集中治療を必要する子どもへの看護について、新生児、低出生体重児の身体的・生理的特徴、および看護の実際を写真をまじえ説明をしながら講義を行った。閉鎖式保育器については、低出生体重児の治療と生活の場の理解を深めることを目的に、実際に触れながら保育器の機能を理解し、保育器内での援助方法を体験した。
3) 短期大学での教育		
(1) 講義配布資料の工夫	平成30年度～令和元年度まで	常磐短期大学幼児教育学科　「子どもの保健ⅠA」「子どもの保健ⅠB」（2年次配当、120名対象）で実施した。保育の現場で、より身近に考え学ぶことができるように、保育・医療・家庭でのそれぞれの関わり・役割に視点を拡げながら学修ができるように授業計画を立案した。「子どもと病気」については、これまでの学修理解を確認しながら、子どもの身体的特徴から病気を結び付け講義を行った。講義での配布資料は、各スライドの重要箇所（1～2箇所）を穴抜きとした。学生からは、重要ポイントが理解しやすいとともに、「講義中、眠くならずに集中できた」というコメントが多くみられた。
(2) 実録映画（講義用）の活用	平成30年度～令和元年度まで	常磐短期大学幼児教育学科　「子どもの保健ⅠB」（2年次配当、120名対象）で実施した。「子どもの疾患」について、各自が保育士として関わる上での課題を自発的・能動的に引き出せるよに授業計画を立案した。保育の現場に引き寄せながら、より身近に考え学び得ることができるように、保育士としての対応方法を講義した。学生の理解を深めるため、適宜、健康な子どもが病気になった事例、取り巻く家族の事例を紹介するとともに、実録映画を紹介し一部講義内で視聴した。学生からは、「病気を持つ子どもと家族の思いをイメージすることができた」「保育士としての役割を考えた」などの意見が寄せられた。
(3) 清拭と感染対策の体験	平成30年度～令和元年度まで	常磐短期大学幼児教育学科　「子どもの保健Ⅱ」（2年次配当、120名対象）で実施した。「子どもの養護の方法」としてモデル人形での臀部浴と学生間での上腕の清拭を実施した。清拭の体験から「子どもの側からの体験を考えることができた」との意見が多かった。「異常症状の対応：下痢」では、保育の現場を想定しながら学べるように、感染対策の必要性の根拠を示しながら各自の演習を支援した。
(4) ICTの活用	令和2年度～現在に至る	常磐短期大学幼児教育学科　「子どもの保健」（2年次配当、120名対象）で実施した。「子どもの身体的特徴」、および「子どもの疾患と対応」について、子どもの体調変化を察知し、健全で安全な生活を確保することができるようになるための授業計画を立案した。コロナ可渦におけるオンライン授業であったため、Google Classroomに、講義動画および課題をupし、各自が保育士として関わる上での課題を自発的・能動的に引き出せるように支援を行った。
2　作成した教科書，教材 1)「発熱した子どもの看護」のシナリオ	令和元年9月	常磐大学看護学部看護学科「情報と看護展開Ⅱ」（専門科目、2年次配当、必修2単位）において実践した。「発熱した子どもの看護」のシナリオは、PBLに基づき、対象の場面から情報を捉え・収集し・判断できるように、小児領域内で検討し作成した。

2）小児看護学実習要項	令和2年4月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。学生の実習が円滑に進むために、実習目的、実習目標、実習のスケジュール、実習の展開方法、提出物、記録の様式、健康観察表、から構成される実習要項を小児領域内で検討し作成した。実習要項をもとに実習前にオリエンテーションを行うことで、学生は実習の具体的な展開が理解でき、不安なく実習を進めることができた。また、記録についてももれなく提出することができた。
3）小児看護学実習評価用ルーブリック・小児看護学実習評価表	令和2年4月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。実習の振り返りとして自己評価をする際に、ルーブリックで望ましい学修修熟度を具体的に示すことで、学生は具体的な評価を理解することができ、自己の実習を評価し振り返ることができた。教員間での公平な評価が可能となり、指導のポイントの明確化することもできた。
4）「慢性期の子どもと家族の看護：白血病の事例」のシナリオ	令和2年5月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護援助」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。学生が対象の子どもだけでなく、家族、きょうだいに視野を拡げ、根拠をもって看護問題・計画を立案するまでの過程を示す資料を作成した。
5）小児の点滴管理のビデオ	令和2年5月	常磐大学看護学部看護学科「生涯発達における援助技術」（専門科目、3年次配当、必修1単位）において実践した。援助技術がより明確に理解できるように、刺入部の確認、ラインの確認、薬剤の確認など輸液管理の観察のポイント、また異常時の対応など援助場面に合わせた内容のビデオ（映像）を作成した。
6）小児の呼吸管理のビデオ	令和2年5月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護援助」（専門科目、3年次配当、必修2単位）において実践した。急性期の看護（喘息で入院をした子ども）の事例では、コロナ渦におけるオンライン授業であったため、援助技術がより明確に理解できるように、酸素吸入、薬剤吸入などの呼吸管理や安全管理などの援助場面のビデオ（映像）を作成した。
7）客観的臨床能力試験における評価表	令和2年7月	常磐大学看護学部看護学科「看護展開導入演習Ⅰ」（専門科目、3年次配当、必修１単位）で実践した。小児の輸液管理における客観的臨床能力試験における評価表を作成した。教員間での公平な評価が可能となった。
8）「固形腫瘍の子ども（幼児）と家族の看護」のシナリオ	令和3年1月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実践した。緊急事態宣言発令中（コロナ渦）の小児看護学実習では、一部が学内実習となった。当該施設での実習を想定した「固形腫瘍の子ども（幼児）と家族」の事例を作成した。
9）「ネフローゼ症候群の子ども（乳児）と家族の看護」のシナリオ	令和3年1月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実践した。緊急事態宣言発令中（コロナ渦）の小児看護学実習では、一部が学内実習となった。当該施設での実習を想定した「ネフローゼ症候群の子ども（乳児）と家族」の事例を作成した。

10）「先天性心疾患の子ども（新生児）と家族の看護」のシナリオ	令和3年2月	常磐大学看護学部看護学科「小児看護学実習」（専門科目、3年次配当、必修2単位）で実践した。緊急事態宣言発令中（コロナ渦）の小児看護学実習では、一部が学内実習となった。当該施設での実習を想定した「ネフローゼ症候群の子ども（乳児）と家族」の事例を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成29年8月	文部科学省大学設置・学校法人審議会における教員審査において、常磐大学看護学部専任講師として「可」の判定を受けた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）小児生体間移植院内コーディネーター	平成13年11月～平成16年3月	平成12年4月から平成13年3月まで、小児生体肝移植の研修を兼ね信州大学附属病院第一外科で勤務（人事交流）。平成13年11月に日本看護協会「臓器移植コーディネーターの役割（30時間）」を受講し、筑波大学附属病院内小児生体肝移植コーディネーターとして、手術決定時期から退院時、また退院後の生活への援助を行った。術前では、医師、病棟看護師、手術室看護師と連携を取りながら、レシピエントである子どもへのプレパレーション、ドナーである保護者および家族へのプレパレーションを、術後は子ども、およびドナーである保護者の心身のケアを行うとともに、退院後の生活に沿った個々の支援を行った。
2）新生児医療におけるディベロップメンタルケア、ファミリー・センタード・ケアの推進	平成26年4月～平成28年4月	筑波大学附属病院NICU、GCU病棟において、低出生体重児およびハイリスク新生児の心身の成長を育むことを目的に、ディベロップメンタルケア、ファミリーセンタードケアを中心としたスッタフ教育を計画立案し実践した（年間5回シリーズとし、1シリーズ毎にビデオ撮影し参加できなかった人は映像を確認しながら学習を進めた）。同時に、外部のディベロップメンタルケア研修会への参加を推進したことで、ディベロップメンタルケアに対する意識を向上させることができ、研究課題としても積極的に取り組むスタッフを輩出することができた。
3）NICU・GCU病棟における研究支援	平成26年4月～平成28年4月	筑波大学附属病院NICU、GCUにおける光や音環境、痛みの評価、母乳育児および母子相互作用に関する研究の助言・指導を行い、院内研究発表会に至ることができた。NICU,GCUに入院をする子どもの父親に着目した研究の支援では、日本新生児看護学会にて発表することができた。
4）小学校3年生親子性教育（筑西市思春期保健事業）	平成21年4月～現在に至る	筑西市思春期保健事業の一環として、筑西市と連携し小学校3年生親子性教育に携わっている。本学および他大学の小児・母性看護領域の教員が、筑西市内全小学校（20校）に赴き、子どもに対しては「大切ないのち」として講義および赤ちゃん人形の抱っこなどを体験、保護者に向けては家庭での性教育について講義を行っている。
5）高校3年生にむけた大学特別講座	平成30年11月	常磐大学高等学校において、看護師を志す3年生にむけ、出張型の大学特別講座「小児看護学の概要」を行った。講義のなかでは、はじめに「子どもはどんな存在だと思うか」など年齢の範囲や特徴・イメージを考え、講義後、子どもはどのような存在なのかを改めてグループで討議し発表を行った。

6）大切な人を亡くした子どものグリーフサポートプログラム	令和元年9月～現在に至る	国内外のグリーフサポート研修会に参加し、任意団体「グリーフサポートいばらき準備委員会」を令和元年に本学内に設立した。運営メンバーとして、大切な人を亡くした子どもを対象としたグリーフサポートプログラムの企画運営を行っている。またファシリテーター養成講座も運営企画している。現在までに、グリーフサポートプログラムは2回、養成講座は3回実施している。
7）水戸市―常磐大学の連携プログラムにむけて「仮）若者から発信する生涯にわたる健康づくり」	令和元年4月～現在に至る	水戸市と本学との更なる連携にむけて、令和元年より、健康栄養学科教員4名、看護学科教員4名とで、水戸市長および常磐地区「ランド常磐の会」会長、事務局長と面談。「仮）若者から発信する生涯にわたる健康づくり」始動にむけ検討を行っている。
8）国立病院機構水戸医療センター　看護部研究支援	令和元年4月～現在に至る	研究基礎コース、研究実践コースに分け、看護研究に必要な基礎知識の講義（3回シリーズ）、研究実践に向けて必要な基礎知識を講義（2回シリーズ）を行いながら研究支援を行った。実践コースでは、講義の他に、研究をまとめあげることができるように、各研究テーマに沿って、個別指導をおこなった（3回）。令和2年度の支援においては、合計11の研究課題を支援し、院内発表、および各学会で発表に至っている。
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 看護婦免許	平成4年4月30日	第749315号
2　特許等		該当項目なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）常磐大学看護学部の学年担任	平成30年4月～現在に至る	常磐大学看護学部1期生の学年担任として、各アドバイザー教員との連携を取りながら、1期生の大学生活における学習面・生活面を把握し、アドバイザー教員とともに相談、助言を行っている。
2）常磐大学看護学部 アドバイザー	平成30年4月～現在に至る	常磐大学看護学部1、2、3期生のアドザイザーとして、前期・後期、また必要時、学生との面談を行い、大学生活における学習面・生活面に対する相談、助言を行っている。
3）常磐大学看護学部 学生支援委員	平成30年4月～現在に至る	学生が円滑に大学生活を送ることができるようように、各学年担任、各アドバイザー教員、教務員会と連携しながら支援を行っている。感染対策としての抗体接種においては、学内保健室、学生支援センターと連携しながら支援を行った。コロナ渦においては、moodleを使用し、健康管理体制を整える共に、適宜、「感染対策だより」などを学生に送信しながら学生の心身面の支援を行った。また学生と協同し、3年次実習前の宣誓式の実行した。

4）常磐大学看護学部 キャリア支援委員	平成30年4月～現在に至る	常磐大学1期生入学時より、4年間のキャリアサポート体制の構築し、各学年において支援を行った。学生がよりキャリア支援計画を身近に感じることができるように、キャリア支援センターと共同し、4年間の支援体制を「TOKIナース キャリアサポート」と名付けると共に、常磐大学のキャラクター「ときわんこ」の看護版「ときわんこナース」のイメージキャラクターを作成した。
5）常磐大学大学院看護学研究科 教務委員	令和4年4月～現在に至る	看護学研究科の教育に関し円滑な運営を図るために、図書・備品の整備を行った。またCNS教育課程申請（小児）にむけ準備を行った。
6）常磐大学大学院看護学研究科 FD委員	令和5年4月～現在に至る	教員同士が互いの授業に参加しあい、多様な授業方法や効果的ば学生への指導・支援方法について学びあい、教育実践ンお室を高める「相互授業参加」の企画・推進・評価を行っている。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 「学術論文」 1.NICU退院後の低出生体重児を持つ母親の育児自信に関連する要因の検討―レジリエンスに焦点をあてて― （修士学位論文）	単著	平成22年度	筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻	低出生体重児の母親の育児自信に関連する要因を検討するために、全国NICUを有する施設において、承諾が得られた35施設に自記式質問紙調査を配付した。基準に合致した62名を分析した結果、母親のレジリエンスと育児自信には関連が認められた。NICUの看護とレジリエンスの関連は認められなかったが、NICUでの看護支援が母親にとって充分であることは、看護師のソーシャルサポートに対する認識を高め、レジリエンスに関連する可能性を有している。
2.低出生体重児を持つ母親の心の支えとなったNICU看護師の関わり―母親による自由記述からの内容分析―	共著	平成24年3月	茨城県母性衛生学会誌第30号 掲載頁16-22	低出生体重児の母親の心の支えとなったNICU看護師の関わりを明らかにするために、全国のNICUにおいて承諾が得られた35施設で、自記式質問紙を配付し調査を行った。78名の自由記述を内容分析した結果、母親の心の支えとなった看護師の関わりは、【自分を尊重していることが感じられる】【明るい気持ちにさせる】【子どもの大切な扱い】【子どもの様子を伝える】【子どもへの関わりを促す】であった。これらは、逆境的状況にある母親の心理的回復を支え、母親の親役割獲得を支える支援であった。 担当部分：研究代表者として計画からデータ収集・分析、執筆までを担当 共著者：南雲史代，村井文江，江守陽子

3.低出生体重児を持つ母親の育児に対する自信に関連する要因の検討―レジリエンスに焦点をあてて―	共著	平成25年3月	小児保健研究 第72巻第4号　掲載頁500-507	低出生体重児を持つ母親のレジリエンスと育児に対する自信の関連、レジリエンスと看護支援の関連を明らかにするために、無記名自記式質問紙調査を実施し、74名を分析した。育児に対する自信は、レジリエンスおよび育児経験が影響していた。さらにレジリエンスは両親・親戚からの援助、夫、年齢が影響していた。レジリエンスが高まることで、退院後に生じる育児上の困難を乗り越え育児に対する自信も高まる可能性が示唆された。 担当部分：研究代表者として計画からデータ収集・分析、執筆までを担当 共著者：南雲史代，村井文江，江守陽子
4.早期産・低出生体重児の 相互コミュニケーション能力に関する研究 ―Communicative Musicality理論を活用した音響分析― （博士学位論文）	単著	平成27年度	筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻	早期産・低出生体重児の相互コミュニケーション能力を明らかにするため、人が生得的に備え持つ音楽性に着目し、早期産・低出生体重児（以下：児）と看護師との交流場面を毎週1回観察を行った。交流場面の音声をCommunicative Musicality理論を活用し音響分析を行った結果、分析対象10名中5名の児が、看護師との相互コミュニケーションを認め、最小修正週数32週5日、平均修正週数34週以降の相互コミュニケーション能力を明らかにした。
5.早期産・低出生体重児が音声的コミュニケーションを図る場としての保育器内外の環境音の実態	共著	平成31年3月	常磐看護学研究雑誌 第1巻　掲載頁37-43	早期産・低出生体重児が過ごす保育器内外の環境音の実態、及び音声的コミュニケーションを図る場としての適切性を検討した。保育器外は平均83.4db、保育器内は平均36.9dbであった。保育器外の騒音レベル、保育器の遮音効果の下、研究者の音声を確認することができ、保育器内においても、音声的コミュニケーションを図ることができる可能性が示唆された。 担当部分：研究代表者として計画からデータ収集・分析、執筆までを担当 共著者：南雲史代,村井文江,江守陽子
6.看護実践に必要な考える力を養う教育の検討	共著	令和4年３月	常磐看護学研究雑誌 第4巻　掲載頁51-55	看護学生が看護実践に必要な考える力を養うための教育方法を検討し、その効果を検証した。面接調査において学生は、自ら学修する力，対象の状況を理解する力等が身についたと回答。対象を捉えるための視点の広がり，情報の収集と整理，思考の言語化等ができるようになったことが示された。批判的思考的尺度による調査では，授業後に有意にポイントが上昇し，批判的思考態度にも効果があることが示され，看護実践に必要な考える力の教育の一定の効果が示唆された。 担当部分：「考える力」の定義を研究代表とともに検討。学生に対し半構造化面接を実施し、内容分析を担当 共著者：沼口知恵子、南雲史代、福田大祐、他
7. 小学3年生親子性教育「命のたんじょう」活動報告	共著	令和5年3月	常磐看護学研究雑誌 第5巻　掲載頁45-53	A市内全小学校3年生を対象とした親子性教育の活動報告および家庭での性教育に必要な支援を検討した。親子性教育の目的は概ね達成できていた。保護者へのアンケート調査では，性教育の実施状況に関連する要因は明らかにならず、家庭における性教育の必要性が理解されながら，あるいは，しなければならないという保護者の認識があるにもかかわらず，性教育の実践は低い状況にあった。性教育を予定している保護者が，性教育を実施できるように継続的な支援が示唆された。 担当部分：研究代表者として計画からデータ収集・分析、執筆までを担当 共著者：南雲史代,中田久恵、村井文江

8.PBLを用いたシナリオ学修効果―学生の面接結果の分析―	共著	令和5年3月	常磐看護学研究雑誌 第5巻　掲載頁35-44	看護学部2年次生に実施しているPBLを用いたシナリオ学修の効果を明らかにした。5名の学生に対し半構造的面接を実施し内容分析を行った。PBLを用いたシナリオ学修は、看護を展開する力および学修に関連した行動の獲得に効果があることが示された。学生は、状況の予測はできるが根拠を説明すること、時間を意識して思考することに難しさを感じており、教員の丁寧な対応が必要であることが示唆された。 担当部分：学生に対し半構造化面接を実施し内容分析を担当 共著者：沼口知恵子、南雲史代、福田大祐
（その他） 「助成金」				
1.子育てに関するヘルスリテラシーの獲得を基盤とした子育て支援モデルの構築 ・種類：基礎研究C ・採択年度：2020年度	分担			子育てに関するヘルスリテラシーを獲得する（情報を入手し、理解し、評価し、子育てに活用する）過程について、子育て支援の活用と子育ての成り行き、促進要因、 阻害要因を含め、時間軸を考慮して質的に明らかにすることを目的とし、1歳の子どもを持つ母親に対し半構造化面接をを行った。現在、TEMを用いて質的に分析を行い、量的研究にむけ準備をしている。
「解説資料」				
1.母子感染から慢性肝炎へ移行した幼児の看護―インターフェロン療法を受けた1歳６カ月児の事例を通して―	共著	平成14年3月	小児看護 第25巻第3号 掲載頁299-307（へるす出版）	肝炎の最新の治療とケアのポイントについて、インターフェロン療法を受けた事例をとおして報告した。母子感染防止処置にもかかわらずB型肝炎を発症し、1歳でインターフェロン(INF)療法を受けた事例の看護を振り返りながら、家族に治療継続の重要性を指導すること、また母子感染による家族内の関係が崩れないように配慮することが重要であることを明らかとした。 担当部分：プライマリー看護師として行った看護計画の編集、考察からおわりを執筆 共著者：南雲史代，真家有子，鈴木淳子，山口貴美恵，山元照美
2.看護基礎教育における重症心身障がい児の看護	共著	令和3年7月	小児看護学　臨時増刊号第44巻8号　掲載頁918-923（へるす出版）	重症児への看護の学習を通して、小児看護の重要な概要を学修することが可能であり、看護職としての姿勢も学修していた。重症児の特徴の把握とケアについては、学生が難しさを感じやすい。そのため教科書内容の充実とともに、具体的な援助技術について効果的な教授方法を検討する必要がある。 担当部分：学生に対し半構造化面接を実施し内容を分析 共著者：沼口知恵子、門間智子、南雲史代，他
「学会発表等」				
1.生体肝移植のドナーとその配偶者へのメンタルサポート	―	平成15年7月	日本小児看護学会第13回学術集会（幕張）	親子間の生体肝移植におけるドナーおよびその配偶者それぞれの問題を明確化することを目的とし、生体肝移植を行った8組の両親に対し、質問紙調査および半構成的面接を行った。ドナー、配偶者ともに、移植決定時は「期待・不安・必要」、移植直前は「不安・覚悟・恐怖」、移植後は「安堵感」であった。ドナーの感情の変化として移植後「痛み・不安・恐怖」といった自分自身にむけられた感情が表出された。 南雲史代，大山由美子

2.静脈内留置カテーテル（中心・末梢）クリニカルパス導入の取り組みと運用状況	―	平成16年12月	第5回医療マネジメント学会茨城県支部学術集会（つくば）	筑波大学附属病院における静脈内留置カテーテル（中心・末梢）クリニカルパス導入の取り組みと運用について、また抱える課題と今後方針を報告した。 南雲　史代
3.子どもの生活に視点をおいた母親への育児支援の取り組み―フェイスシートを活用した母親の育児支援に対するイメージ変化を通して―	―	平成19年11月		GCUに入院する低出生体重児の母親6人に対しフェイスシートを活用した育児支援を行った。母親3人に対し半構成的面接を行い、母親の育児に対するイメージの変化を明らかにした。フェイスシート活用前は、「自責の念」「育児の孤独」「母親役割の重圧感」が抽出されたが、活用後は子どもの生活のイメージがついたことで「不安の減少」「子育てをやっている実感」「育児への自信」へ繋がり、自責の念が薄れていた。 南雲　史代
4.低出生体重児を持つ母親の心の支えとなったNICU看護師の関わり―母親による自由記述からの内容分析―	―	平成23年6月	第30回茨城県母性衛生学会（阿見）	全国のNICUにおいて承諾が得られた35施設で調査を実施。低出生体重児を持つ母親を対象に無記名自記式質問紙を配付し、78名の自由記述を内容分析した結果、母親の心の支えとなった看護師の関わりは、【自分を尊重していることが感じられる】【明るい気持ちにさせる】【子どもの大切な扱い】【子どもの様子を伝える】【子どもへの関わりを促す】であった。これらは、逆境的状況にある母親の心理的回復を支え、母親の親役割獲得を支える支援であった。 南雲史代，村井文江，江守陽子
5.低出生体重児を持つ母親の育児に対する自信に関連する要因の検討―レジリエンスに焦点をあてて―	―	平成23年9月	第58回日本小児保健協会学術集会（名古屋）	低出生体重児を持つ母親のレジリエンスと育児に対する自信の関連、レジリエンスと看護支援の関連を明らかにするために、無記名自記式質問紙調査を実施し、74名を分析した。低出生体重児を持つ母親の育児に対する自信は、レジリエンスおよび育児経験が影響していた。レジリエンスが高まることで、退院後に生じる育児上の困難を乗り越え育児に対する自信も高まる可能性が示唆された。 南雲史代，村井文江，江守陽子
6.NICU・GCUに入院となった子どもの父親の不安―緊急入院・予定入院での比較―	―	平成26年11月	第24回日本新生児看護学会学術集会（松山）	子どもの入院が予期されていたかどうかによって父親の不安の強さや内容に違いがあるのかを明にするために、NICU・GCUに入院となった子どもの父親に対し質問紙調査を行った。緊急入院、予定入院での父親の不安の強さに統計学的な有意さは認められなかった。両群とも父親や子どもを尊重した関わりと、子どもを安心して預けることができる万全な体制が、父親の不安を軽減させていることが明らかとなった。 岡野香，角鹿奈穂，南雲史代，大山由美子，古谷佳由理
7.当院における褥瘡ワーキンググループメンバーと専任看護師の褥瘡管理に対する意識と活動の実態	―	平成27年7月	第12回日本褥瘡学会関東甲信越地方会学術集会（前橋）	当院における褥瘡ワーキンググループメンバーと専任看護師の褥瘡管理に対する意識と活動の実態を紹介した。 熊田純子，菅原美知子，南雲史代，荒井志保，谷澤伸次

8.Communicative Musicality理論からみた早期産・低出生体重児の相互コミュニケーション能力	―	平成28年12月	第26回日本新生児看護学会学術集会（大阪）	早期産・低出生体重児の相互コミュニケーション能力を明らかにするため、人が生得的に備え持つ音楽性に着目し、早期産・低出生体重児（以下：児）と看護師との交流場面を毎週1回観察を行った。交流場面の音声をCommunicative Musicality理論を活用し音響分析を行った結果、分析対象10名中、5名の児が看護師との相互コミュニケーションを認め、最小修正週数32週5日、平均修正週数34週以降の相互コミュニケーション能力を明らかにした。 南雲史代，村井文江，江守陽子
9. 「地域―大学連携における思春期保健事業　小学校3年生親子性教育“いのちのたんじょう”」	―	令和元年11月3	日本学校保健学会第66回 学術大会（東京）	A市思春期保健事業の一環として、A市と連携し市内の小学校3年生を対象とした親子性教育を実施している。保護者を対象に家庭での性教育および講和に関する感想等のアンケート調査を行い、性教育に対する保護者のニーズの把握と今後の課題を見出した。加えて、親子を対象とした継続的、かつ親子の信頼関係を基盤とした日常的な性教育を行う教育プログラムの開発が望まれることを明らかにした。 発表者：南雲史代、中田久恵、村井文江
10. 小学校3年生を持つ保護者の家庭における性教育の実施状況と関連する要因の検討	―	令和4年8月	第41回日本思春期学会総会・学術集会（つくば）	家庭における性教育の実施状況と関連する要因を明らかにするために、「親子性教育」に参加した小学3年生を持つ保護者を対象に無記名質問紙調査を行った。性教育を行っている群は17.0%、行う予定群68.5%、行う予定がない群14.5%であったが、性教育の実施状況に関連する要因は明らかにならなかった。約7割の人が性教育を行うことを予定していた。今後、必要とする具体的な知識を明らかにし支援するとともに、自信を持って継続した性教育が行えるプログラムの必要性が示唆された。 発表者：南雲史代、中田久恵、村井文江
11. 保護者参観の小学3年生の親子性教育に向けた市・教育委員会・大学講師の連携	―	令和4年8月	第41回日本思春期学会総会・学術集会（つくば）	親子性教育は、教育委員会、A市、講師の協議のもと、授業内容を検討し全小学校で統一できている。各小学校での実践においては生徒の状況に応じた配慮を行い、授業を組み立てている。親子性教育が10年以上継続できている理由には、A市の思春期事業への積極的と陸に、教育委員会の協力、各小学校の性教育に対する理解によるものであり、この成果として親子性教育の出席率はほぼ100%を維持している。今後、講和後の性教育の実態について明らかにしながら、性教育を支援していく必要がある。 発表者：中田久恵、南雲史代、村井文江